



人工内耳装用児の学校生活 におけるバリア

—ACICの調査結果から—

齋藤 友介
(大東文化大学)

我が国に固有の問題と 通常学級における社会的障壁(バリア)

- ◆近年、①インクルーシブ思潮の台頭や、②新スクの普及、および③人工内耳手術の低年齢化により、小・中学校の通常学級で学ぶCI児が増加している

しかし、



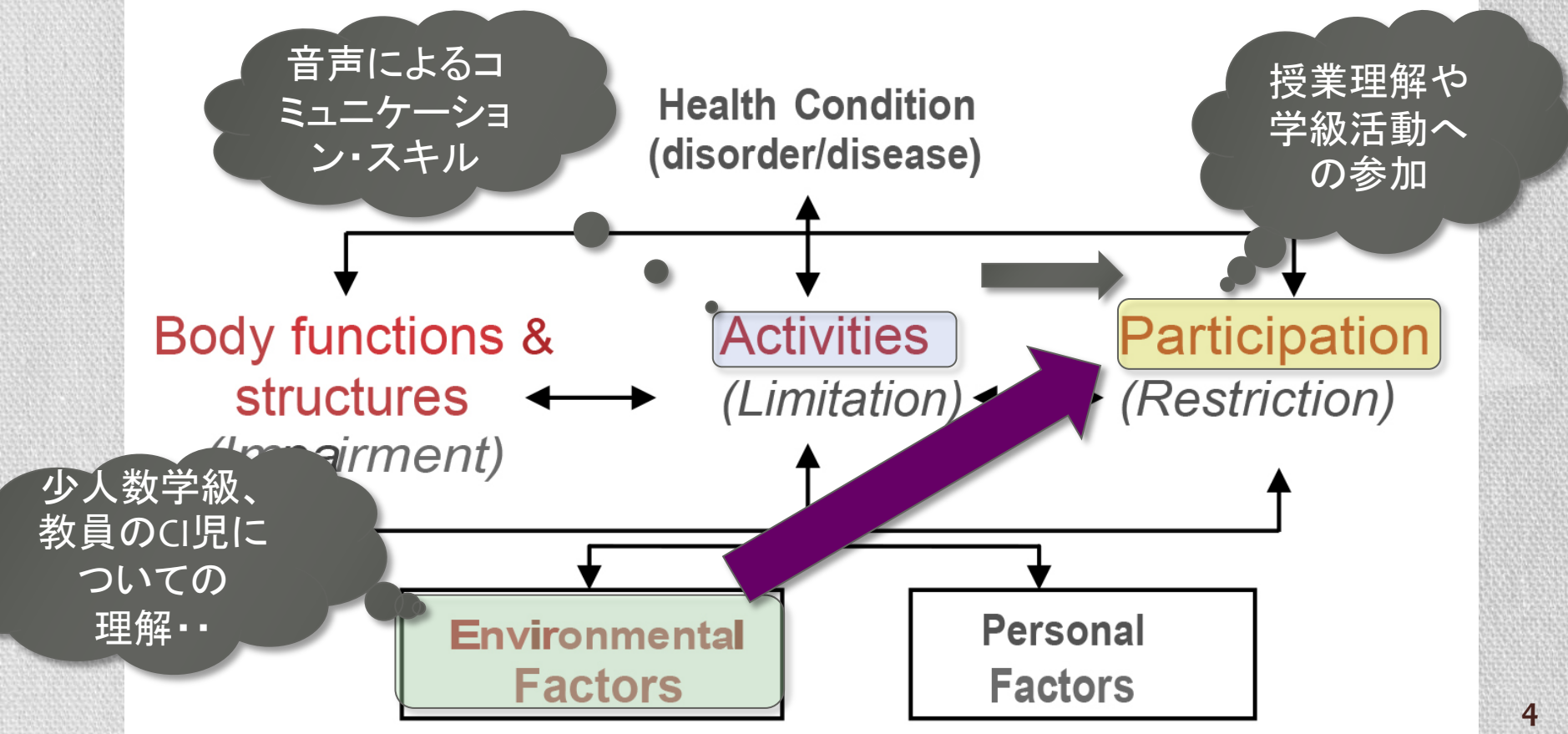
- ◆通常学級の学級規模(児童・生徒数)は、インクルーシブ教育が進展する先進諸国の、およそ2倍である
- ◆国連・障害者の権利条約(第24条)が求める、通常学級における聴覚障害児への「合理的配慮」(情報保障など)は、未だ整備されず喫緊の課題である

教室における社会的障壁(バリア)

- (その1): 1学級あたりの児童・生徒数(35～40人)
→騒がしい教室、大人数での話し合い(FMシステムやCIの両耳装用では解決しない。)
- (その2): インクルーシブが進む諸外国では欧米では使用可能な情報保障(ノートテイクや手話通訳)の未整備
→文科省の動きは鈍い
- (その3): 通常学級の教師の聴覚障害についての知識不足
→CI児を聞こえる子どもと勘違いしがちである(Marschark,M.)

国際生活機能分類: ICF (WHO, 2001) からみた 人工内耳装用児の授業理解と学級活動への参加

◆ 人工内耳装用児の授業理解や学級活動への「参加」は、
本人の聞こえの状態のみによって実現するものではない。



【研究の概念モデル】

『人工内耳装用児の学力と学校・教育場面における 機能的アウトカムに関する研究』

【基盤研究(C):代表研究者:齋藤友介(2012～2014年度)】



CI児の授業や学級活動への「参加」の条件



機能的アウトカムとは何か？

◆「[機能的アウトカムとは]健康状態に起因するものであり、人々の日常作業を構成する行為の遂行と、社会に意義深く参加する人々の能力に影響を与えるものである。」(Frattali,1998)

◆学齢児においては、授業理解や学級活動への参加状況についての聴覚障害児の自己評価



◆今日まで我が国では注目されることはなく、バリア(社会的障壁)が多いCI児の通常学級での環境整備や合理的配慮を考える際に、慎重に検討されねばならない概念である

対象児のプロフィール

- ◆対象は2013年1月から2014年1月末に東京医科大学ACICに来院した、小学4年生から中学3年生の、計80人(小学生36人、中学生44人)であった
- ◆対象児の教育の場は、小学校もしくは中学校の通常学級が36人、ろう学校が44人であった
- ◆評価時の年齢は平均13.0歳(1SD:1.7)、CI埋め込みは平均4.3歳(1SD:2.0)、装用期間は平均8.6年間(1SD:2.3)、CI装用時の音場聴力(SPL)は平均25.4dB(1SD:6.4)、語音聴取能は平均81.9%(1SD:22.0)であった

機能的アウトカムの評価方法

- ◆アリゾナ大学のAntiaら(2007)を参考に作成した、日本語版CPQ(齋藤ら,2013)を用いて、CI児の機能的アウトカムに関する調査(面接)を行った
- ◆同尺度は聴覚障害児が自己評価により回答する、16項目(4領域「教師理解(UT)」「生徒理解(US)」「情緒的にポジティブ(PA)」「情緒的にネガティブ」(NA))から構成される、心理尺度(リカート形式)である
- ◆今回は「教師理解(UT)」と「生徒理解(US)」に着目し、人工内耳装用児の学級における参加の状況を検討した
- ◆なお、UTでは0.70、USでは0.72の α 係数が得られた

日本語版CPQ(教師発言の理解:UT)

聴覚障害生徒向け学級参加尺度【教師の理解:UT】

問1 私はクラスで先生が話す内容を理解している。

問2 先生が宿題を出した時、私はその内容を理解している。

問3 先生が他の生徒の質問に答えている時、私はその内容を理解している。

問4 先生がテストのために何を準備したら良いのかを教えてくれた時、私はその内容を理解している。

日本語版CPQ(他の生徒の理解:US)

聴覚障害生徒向け学級参加尺度【他の生徒の理解:US】

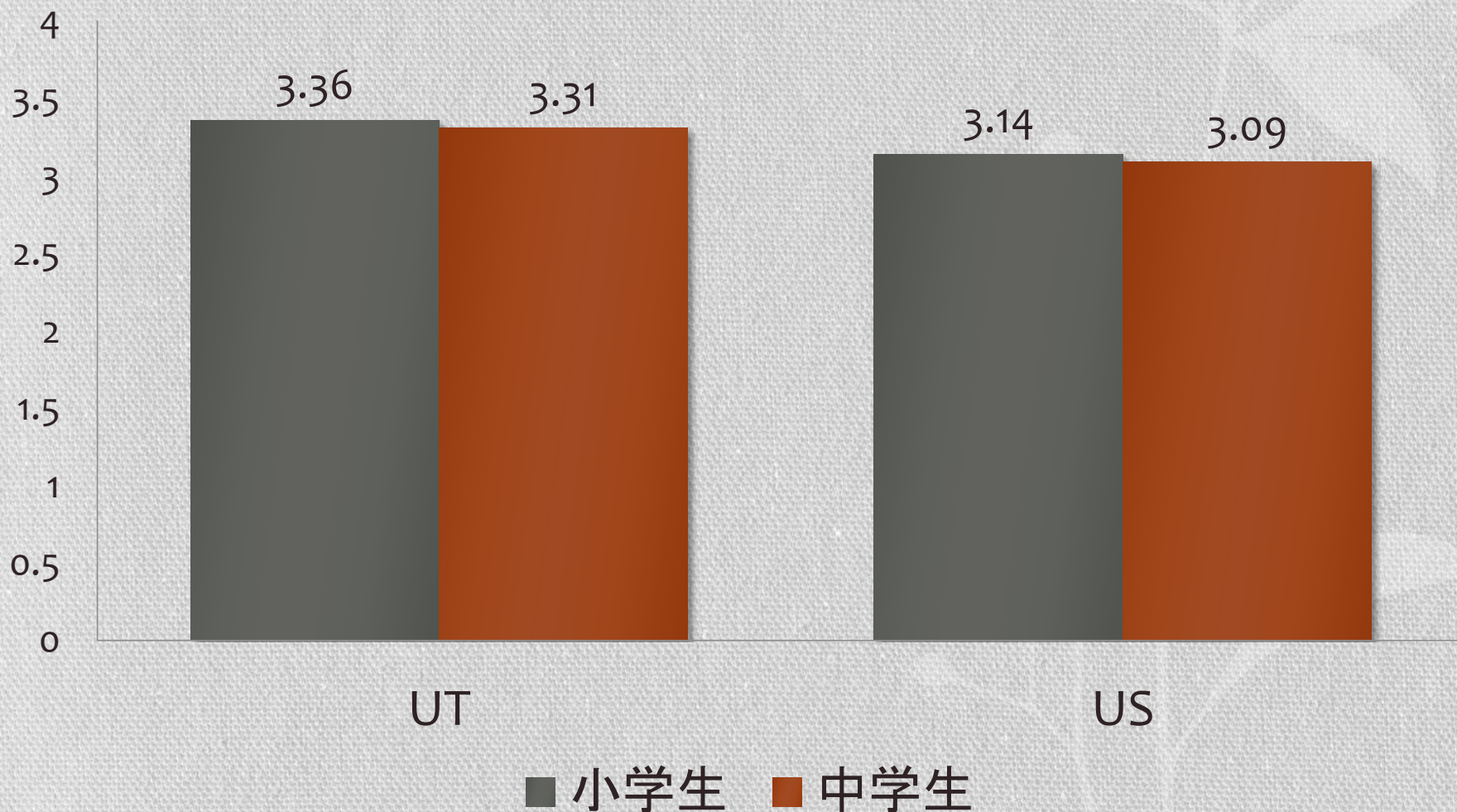
問5 私はクラスの他の生徒が発言している時に、その内容を理解している。

問6 私はクラス全体での話し合いに、参加できている。

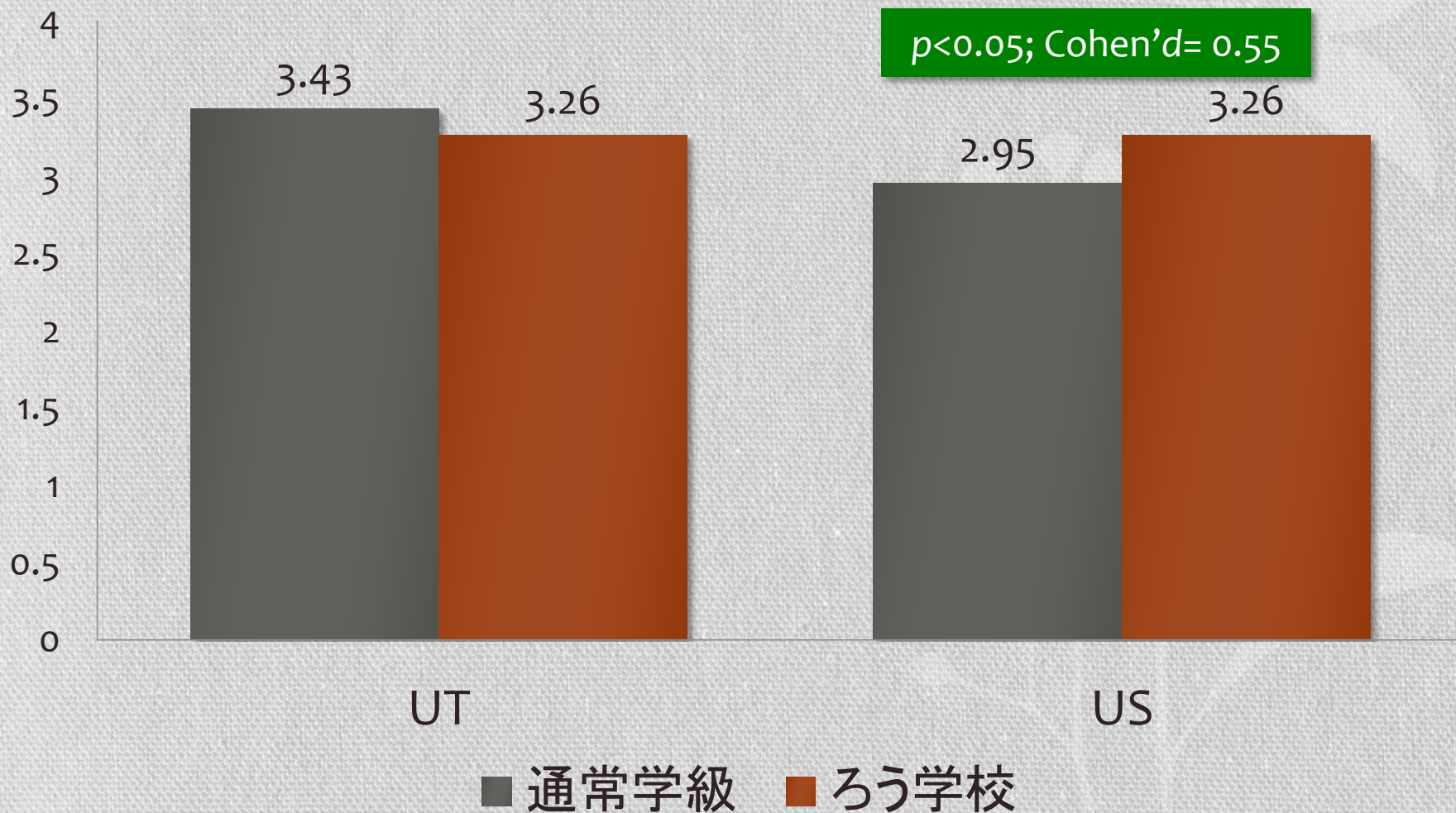
問7 グループ(班)での話し合いの時に、私は他の友達の発言を理解している。

問8 先生の質問に他の生徒が答えている時、私はその内容を理解している。

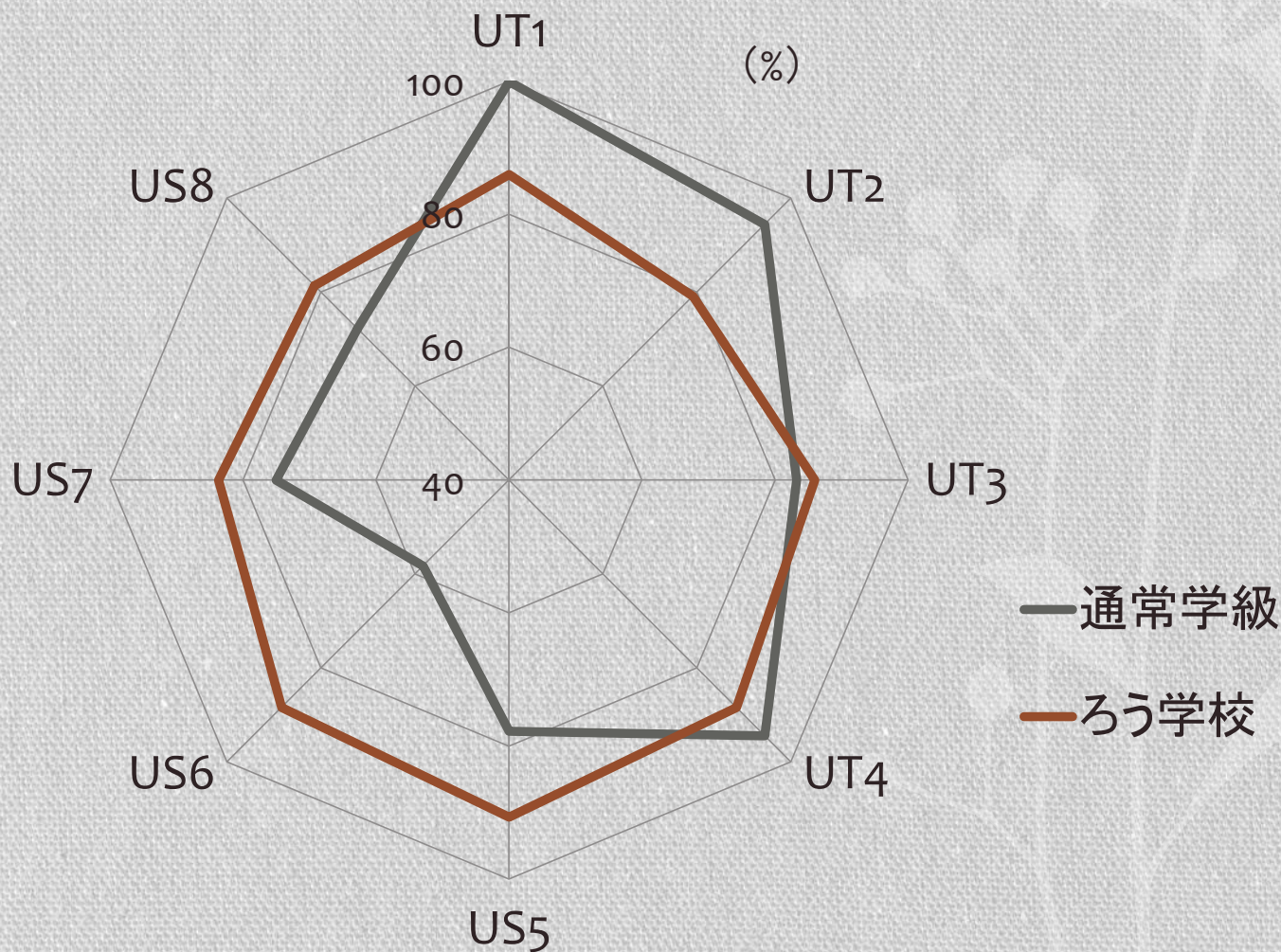
学校段階からみた日本語版CPQの成績



学校種別からみた日本語版CPQの成績



教育の場からみた 「参加できている」生徒の割合 (UT、US)



教師の発言への理解(UT)と 諸変数の関連

- ◆ 暦年齢(CA) : -0.06 (ns)
- ◆ 人工内耳(CI)の埋め込み年齢 : -0.05 (ns)
- ◆ CIの装用期間 : 0.01 (ns)
- ◆ 直近のCI装用時の音場聴力 : 0.03 (ns)
- ◆ 語音聴取能 : 0.25 ($p < 0.05$) * (ns) * インテ小0.05(ns)、中0.36 (ns)
- ◆ FMシステムの使用 : 0.21 ($p < 0.10$) * インテ小0.53($p < 0.05$)、中0.02 (ns)
- ◆ WISCのPIQ(又はPRI) : 0.21 (ns)
- ◆ WISCのVIQ(又はVCI) : 0.40 ($p < 0.01$)



・CIの手術時期や装用期間、音場聴力から、「教師の発言への理解」を説明することはできず、語音聴取能のみで関連を認めた

他の生徒の発言についての理解(US)と諸変数の関連

- ◆ 暦年齢(CA) : -0.05 (ns)
- ◆ 人工内耳(CI)の埋め込み年齢 : 0.08 (ns)
- ◆ CIの装用期間 : -0.05 (ns)
- ◆ 直近のCI装用時の音場聴力 : -0.09 (ns)
- ◆ 語音聴取能 : 0.19 (ns)
- ◆ FMシステムの使用 : 0.01 (ns)
- ◆ WISCのPIQ(又はPRI) : -0.09 (ns)
- ◆ WISCのVIQ(又はVCI) : -0.12 (ns)



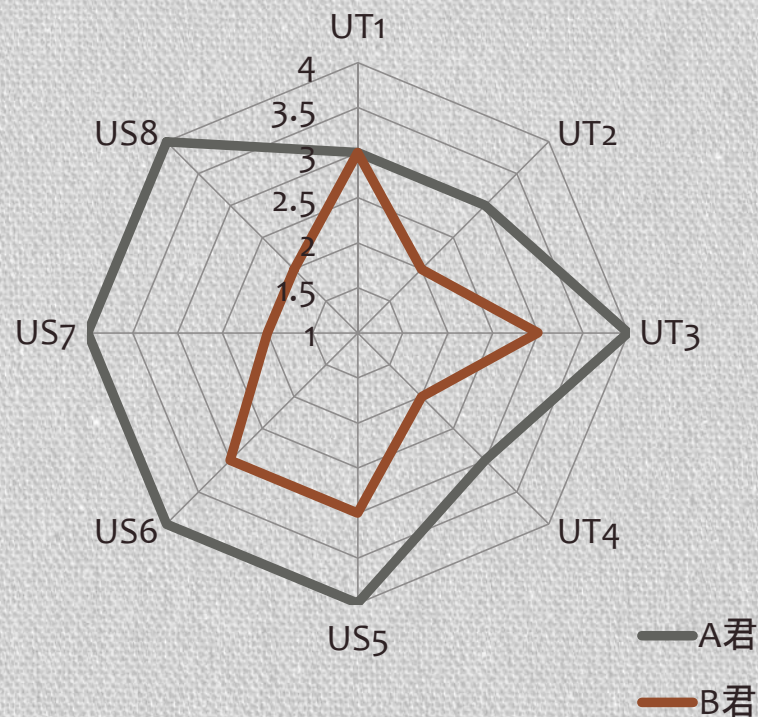
- ・CIの手術時期や装用期間、現在の聞こえの状態から、「他の生徒の発言への理解」を説明することはできない
- ・ノートテイクやPCテイクなどの、情報保障を含む教室の環境整備の必要性が推察される

「合理的配慮」の有無が 日本語版CPQ成績に及ぼす影響

中学生のプロフィール

- 2人の中学2年の男子生徒
- 1開始、A君は生後4歳で、B君は2歳半でCI(C社製N24)を埋め込み手術を受けた
- とともに難聴幼児通園施設を利用し、小学校では通級指導を利用しながら、通常学級に在籍
- 現在の装用閾値は25dB(SPL)、語音聴取能は概ね90%
- 現在A君は、中学校でも通級を継続するとともに、通常学級ではノートテイク(NT)を、本人の希望により利用している
- B君は中学は通常学級のみで過ごし、本人の希望により、NTもFMシステムも利用していない
- 両者とも構音は明瞭で、知的にも正常範囲

CPQのコントラスト



まとめ

- ◆CI児の機能的アウトカムのうち、教室での教師の発言を理解する「教師理解(US)」の得点は、現在の語音聴取能ならび、言語性知能と有意な関連を示した
- ◆他方、他の生徒と教師のやりとりの理解を意味する「生徒理解(US)」では、聴能学的な変数との関連を認めなかった
- ◆CI児の機能的アウトカムは、小学校段階では差が認められないものの、中学生になると、通常学級で学ぶ生徒では、ろう学校で学ぶ生徒に比して、「生徒理解(US)」の成績が有意に低下することが示された
- ◆これらの分析から、現状ではCI児が通常学級において、教師の発言を理解することは出来ても、話し合いなどのダイナミックなコミュニケーションに、十分に参加できていない実態が、明らかにされた

付記 本研究はJSPS科研費24531265の助成をうけて実施された。